

國學院大學學術情報リポジトリ

正月の疱瘡神祭祀

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石垣, 絵美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001570

正月の疱瘡神祭祀

The Smallpox Goddess Worship on New Year in Japan

石垣 絵美

キーワード：年初祭祀 疱瘡神祭祀 治病呪術 疫神鎮送 年神の性格

关键词：新年祭祀 天花神祭祀 治病咒术 疫神镇送 年神的性格

要旨

本稿は様々な形式をもって表現、表象されている疱瘡をめぐる習俗から、正月に疱瘡神をまつる民間伝承を対象とし、旧来の研究が行わなかった正月の疱瘡神祭祀の全国的な比較分析を行い、その様相並びに疱瘡神と他神の関係性を検討することで、なぜ正月に厄神や疱瘡神をまつるのかという問題に取り組んだ。

その結果、疱瘡神祭祀の方法は他の神と異なり、疱瘡治病呪術に用いる疱瘡治癒を促したり症状を軽減させる効果を持つ呪物や、赤色の表徴物を使用するという特殊性を持つことや、正月の疱瘡神祭祀と疱瘡罹病時に行われる呪術に類似点が見られることから、疱瘡罹病時、流行時や種痘接種時に行っていた呪術が、年中行事に組み込まれた可能性を指摘した。また災厄をもたらすアラミタマ（荒魂）としての機能を持つ年神の、荒ぶる恐ろしい神としての性格が、厄神や疱瘡神の性格と結び付き、年神と共に疱瘡神を年初にまつり早いうちに帰ってもらうことで、一年間安泰に過ごそうとする心意によって、年初の疱瘡神祭祀は形成されたと指摘した。

摘要

本文将要各种各样的形式表现，表象的天花习俗出发，且以正月里祭拜天花神的民间传承为对象，将对之前没有进行深入探讨研究的正月的天花祭祀进行全国性的分析比较，进而分析和探讨天花神和其他神之间的关系。并探明人们为何要在新年祭祀痘神或厄神（引起灾难的神灵）的理由。

通过研究，对于天花神的祭祀方法和其他的神的祭祀方法不同，通过使用能够减轻天花症状的红色咒物，进行天花治愈的特殊性。而且新年的天花神的祭祀和患有天花时举行的咒术的类似点出发，可以说有把患有天花，或天花流行的时候种痘接种时举行的咒术添加到了年中活动中的可能性。并且和能带来灾厄性质的的年神结合，赋予了天花神狂暴恐怖的性格。根据厄神和天花神的性格，年初的时候祭祀天花神是为了让天花神和年神一起早点回去，从而祈求家人的一年安泰。因此新年初形成了祭祀天花神的习俗。

はじめに

日本の民間伝承において病気の名称に「神」をつけて呼ぶ例は疱瘡神の他になく、それだけ疱瘡が特別な病気であったことが窺える。また疱瘡への関心はその対処をめぐる民間伝承にも表れ、例えば疱瘡神を送り出す疱瘡踊りという芸能や、正月に疱瘡神を迎えまつる民間伝承などは、疱瘡への対処が芸能や年中行事として形成されている例であると言える。その他に疱瘡に対抗するために用いられた疱瘡絵や、疱瘡神を表象する疱瘡神石塔なども存在する。このように疱瘡をめぐる習俗は様々な形式をもって表現、表象されている。本稿ではこうした様々な疱瘡をめぐる習俗から、正月に疱瘡神をまつる民間伝承を対象とする。

1. 問題点の所在

旧来の研究は正月にまつられる疱瘡神を、厄神の一種として扱っている。まず旧来の研究が取り上げた年初の厄神祭祀に関する論を整理していく。丹野正は「厄神の宿」⁽¹⁾において、年取りの晩に厄神を迎えて一晩家にまつり、翌朝送り出す儀礼に対し、年取りの晩に部落の入口から家の中へ丁重に迎え、供えた物を後で家族で食べることなどが、大歳の晩に訪れる歳神と共通していることから、もともとは歳神を迎える行事だったものが、年神祭祀が失敗すると厄病の如き祟りに見舞われるという畏怖心によって厄神を買収する形にまで零落したものである、と考察している。また「歳徳棚と並んで疫病神の年取り棚が設けられる例は(中略)年神と厄神との接近の一段階を語るものか」と述べている。丹野の研究を受けて大島建彦は「信仰と年中行事」⁽²⁾において、丹野の祖霊零落の説が全ての事例に当てはまる訳ではないと否定し、盆に精霊と外精霊がともにまつられるように、正月においてもそれぞれに相当するまつりがならび行われていたのではないかと考察している。丹野は、年初の厄神祭祀の前身が年神祭祀であると考えており、年神の登場しない厄神のみをまつる事例を、年神祭祀から厄神祭祀へ変化した形であると説明する。そして年神と厄神が同時にまつられる事例を、年神と厄神の接近の一段階であるとするが、この2つの事例の前後関係について述べて

(1) 丹野正「厄神の宿」『民間伝承』第16巻第12号、日本民俗学会、1952

(2) 大島建彦「信仰と年中行事」『日本民俗学大系 第7巻 生活と民俗(2)』平凡社、1959

いない。大島の、盆の精霊と外精霊に対するまつりが、正月の年神と厄神に対するまつりに相当するという見解は、根拠となる資料を明示せずに結論に至っており、説得力に欠ける。

丹野と大島に次いで三崎一夫が「正月行事における疫神鎮送について」⁽³⁾において、正月の疫神鎮送儀礼を(1)大晦日に主に厄神を対象として迎え、特別に棚を作るか奥座敷に案内して歓待し、元日の早朝に送り出すことで、来る年の疫神より蒙る不幸を除こうとする形態。(2)大晦日から正月にかけて主に疱瘡神を対象としてまつり、神棚か年棚の傍に他の神の供物とは区別された餅や膳を供え、疱瘡に罹らないことを願う形態、の2形態に分類した。これに対し田中宣一は『祀りを乞う神々』⁽⁴⁾において大晦日から正月にかけての厄神祭祀を(A)積極的に迎え入れ、年神と差を付け粗末に扱い早々に送り出し、その霊力の及ばないことを期待する形態。(B)積極的に迎え入れ、年神と差を付け粗末に扱い、年神と同じ期間祀る形態。(C)厄神が年神と一緒に訪れ来るものだと考え、自然に迎え入れ、年神と差を付け粗末に扱う形態、の3形態に分類した。また田中は年初に厄神をまつる理由を、先に雑神をまつり主神への障りを未然に防ぐという日本の祭りの構造によると指摘した。

三崎の分類は、まつりの期間、対象、場所、目的による分類であるが、(1)の類型に関しては、年神と厄神のまつられ方の区別の有無について述べておらず、(2)の類型に関しては、疱瘡神の送迎の有無について述べていないというように、分類要素に漏れが見られる。田中の分類は、迎えの方法が積極的であるか自然的であるか、年神と厄神のまつり方の区別の有無、年神と厄神の送りの時期の相違の有無、の3点を基準にした分類であり、三崎の分類と比較すると、年初祭祀を迎え・まつり・送りの3構造に分けて考えている。

このように旧来の研究における年初の厄神祭祀をめぐる民間伝承は、日本の年中行事を含めた祭祀の構造を捉えようとする中で取り上げられ、祖霊祭祀との関わりや、その類型化に焦点が当てられている。しかしいずれの研究も、青森から鹿児島における事例の蒐集に基づいた全国的な比較分析を行っていない。

また先行研究において、年初に疱瘡神を迎える事例が何例か報告され、類型としても取り上げられているが、この民間伝承における疱瘡神祭祀に対する分析は

(3) 三崎一夫「正月行事における疫神鎮送について」『東北民俗』5、1970

(4) 田中宣一『祀りを乞う神々』吉川弘文館、2005

十分ではなく、本伝承における疱瘡神が、数々の厄神のうち特別視される神であるのか、ただ単に厄神の一種として考えられているのか、厄神と疱瘡神の関係性を検討する必要がある。また本来明確にすべきである、なぜ正月に厄神や疱瘡神をまつのかという問題に取り組む必要がある。これらの問題を受け、本稿では疱瘡神の、青森県から佐賀県の年初祭祀の様相と、年初祭祀における他神と疱瘡神の関係性を検討する。

2. 正月の疱瘡神祭祀の様相

本章では筆者が東京都八王子市上恩方町における聞き書き調査によって収集した事例の分析から、現代まで伝承されている正月の疱瘡神祭祀の様相を検討する。

〈東京1〉東京都八王子市上恩方町駒木野H家⁽⁵⁾

調査当時、上恩方町駒木野地区の世帯数は10世帯で、高齢者の一人暮らしが多く、地区内に住む子どもは中学3年生2名と、高校生3名、大学生1名と少ない。調査対象としたH家の話者の話によると、同家では2013年12月31日まで年神棚と疱瘡神の棚を作っていた。2014年12月31日は、同年12月に駒木野内で葬儀があったため、棚を作らなかったと言う。調査当時、上恩方町内で年神棚と疱瘡神の棚を作っている家はH家のみだが、以前は他家でも同じような棚を作っていたという。

2013年12月31日に行った年神棚と疱瘡神の棚作りの手順は次の通りである。12月31日早朝に当主を中心に三男(昭和40年代生まれ)が手伝いに加わり、母屋に蓆を敷いて年神棚と疱瘡神の棚を作る。現在は棚を作る前に風呂に入る、下着を着替える、女性は棚を作る部屋に入ってはいけない、などの決まりは無いが、女性は極力関わらないようにしている。また本来は当主と跡継ぎが棚を作る役を担うことになっているが、棚作りに興味を持つ三男が手伝いのために帰省してくれると言う。現在は2010年に作った棚の簀子状の部分を保管しておいて再利用している。母屋の天井に刺した釘から棚の四隅を吊るすための藁縄8本(年神棚用4本、疱瘡神棚用4本)、棚の上に載せる疱瘡神の赤い幣束を挿すための藁束、供物(重ね餅・ミキノクチ・蠟燭)、棚の前面に張る注連縄と注連縄に挿す松の

(5) 2015年5月17日筆者調査、話者：H家当主、生年1936年

枝、年神棚の注連縄に付けるダイダイは、毎年新しいものを使う。また年神棚と疱瘡神の棚の注連縄に付ける白い幣束と、疱瘡神の棚に載せる藁束に挿す赤い幣束は、暮れに近い日曜日に、上恩方町高留の惣社宮尾神社の神主が作ったものを届けに来るので、それを利用する。

年神棚の場合は、再利用する棚の前面に藁をなつて作った注連縄を張り、注連縄から藁を垂らし、シデ、松、ダイダイ、ユズリハ、ウラジロを添える。疱瘡神の棚の場合は、やや大きめの注連縄を張り、真ん中に松を添えたシデを1つ付ける。年神棚の場合棚の上には、めいめい盆に半紙を敷いて上にオスワリ（2枚重ねの餅）と2枚重ねにした盆を置き、その前側に28日に作っておいた箸一膳とミキノクチ2つ、蠟燭を添える。疱瘡神の場合も供物はほぼ同じで、赤い幣束を刺した藁束を奥に置く点と、箸は添えない点だけ異なる。完成した棚をオモテと呼ばれる部屋の決められた場所に、一年中木の釘を打ちっぱなしにしておき、そこに棚の四隅からのびる藁縄を結びつけて、正面から見てオモテの左手隅の廊下寄りに、棚の前面が台所側に向くように吊るす。正面から見て手前に年神の棚、その奥に疱瘡神の棚を吊るす。恵方に吊るすのではなく、毎年同じ方角に吊るすと言う。

1月4日に棚を木の釘から外し、来年再利用する棚の簀子状の部分以外を1月7日に駒木野地区の稲荷神社の参道の入口に置きに行き、1月14日に上恩方町の火祭りであるセーノカミで燃やす。セーノカミとは場所の名前ではなく、燃やすものと燃やす行事を指すと言う。以前セーノカミは小学校、高等小学校の子どもたちが町中の家々を廻ってお飾りを集めて燃やす行事であったが、現在は年番という上恩方町自治会長を兼ねる者が1年交替で仕切り、近年は正月飾りを飾る家が減少し、燃やすものが少なくなったので、飾りを集めて積み上げて円錐形にはしなくなった。また藁ばかりなので燃えにくくなってしまったので、年番がその辺に落ちている杉の葉を加えて燃やしていると言う。

再利用する棚の簀子状の部分は、ヌルデ（カツの木、カツンボウとも呼ぶ）の枝を用いて作られている。まずヌルデの木の枝を7、80センチメートルほどに切って縦に渡す枝を4本（年神棚用2本と疱瘡神の棚用2本）作り、次に横に渡す枝を4、50センチメートルほどに切って年神棚用に12本、疱瘡神棚用に10本作る。これらの枝は縦に半分に分けて半円柱の形にし、皮を剥ぐ。半円柱の平らな部分（ワリと呼ぶ）を下に、盛り上がった部分（ヤマと呼ぶ）を上にして、少し間隔をあけて縦に2本並べ、その上に残りの枝を横に間隔をあけないように並

べ、縦の枝と横の枝が重なる部分を、当日の朝なった藁縄で「×」の形に縛って簀子状に固定する。

年神と疱瘡神で棚の形状が異なり、棚の簀子状の部分の棒の数が年神は12本、疱瘡神は10本で、疱瘡神の棚の方が少し小さくなるようにする。年神棚は注連縄から藁を垂らし、シデ、松、ダイダイ、ユズリハ、ウラジロを添えるのに対し、疱瘡神の棚の場合はやや大きめの注連縄を張り、真ん中に松を添えたシデを1つ付ける。また棚を吊るす位置も年神棚の方が疱瘡神の棚より少し前にし、供物は同じであるが、疱瘡神に箸は添えないなど、まつり方にも差を付ける。

入江英弥による同家における2010年12月30日歳末の疱瘡神棚作りに関する報告⁽⁶⁾によれば、2010年には棚を一から作っている様子が報告されているが、筆者による調査の結果、2010年の時点で同家では既に棚の底面の再利用を開始しており、入江氏の調査に際して、特別に以前の手順を再現したものであったことが分かった。

棚作りに使われる稲藁は、以前はH家が持つ水田で作ったものを取っておいて使ったが、現在は稲を作っていないので、近所の水田を持っているM家から購入している。そのM家も、此頃作る稲は品種改良が進み風で倒れないように丈が短いので、丈の長い藁をこの行事のために購入している。棚の主な材料であるヌルデの木は細工がしやすいが、薪にしても火力が無く使い道があまり無い雑木であり短命な木であるため、近年は減少して入手困難となっている。2010年に作った際は事前にどこの家に生えているのかを下見しておき、伐って来たと言う。棚の注連縄につけるダイダイ、ユズリハ、ウラジロは、駒木野地区の隣の狐塚地区のY商店で調査当時も購入可能であった。調査当時ミキノクチも東京都福生市の商店で購入可能であった。

話者は5、6歳から父親の棚作りを見て、縄をなうなどの手伝いをしながら作り方を覚えたと言う。調査当時、駒木野には子どもが少なく、棚作りやセイノカミを担う人物がいないことや、棚作りは重労働であるため体力的に継続が不可能であること、材料の入手が困難になってきていることが、この行事を変化させている。また話者は疱瘡の流行を経験したことも、痘痕面の人を見たこともないと言う。毎年やっていることだから継続したいという気持ちでこの行事を継続している。

(6) 八王子市市史編集専門部会民俗部会『新八王子市史民俗調査報告書第1集 八王子市西部地域 恩方の民俗』八王子総合政策部市史編さん室、2012

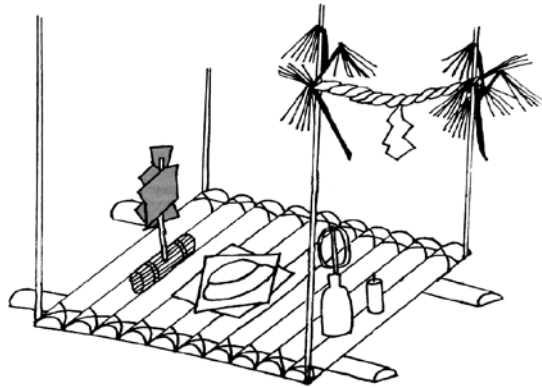


図 1 H家の疱瘡神棚（聞き書きをもとに筆者作成）

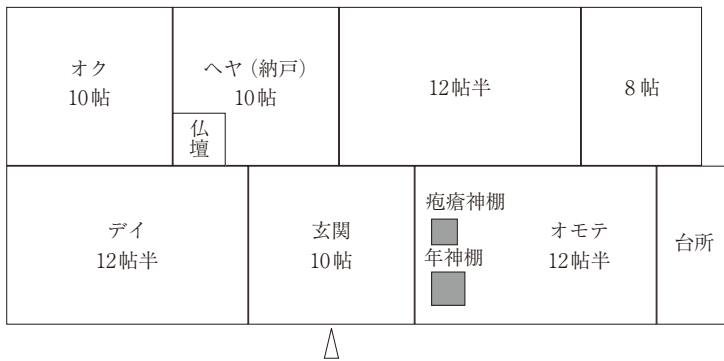


図 2 H家平面図と年神棚、疱瘡神棚（聞き書きをもとに筆者作成）

〈東京 2〉 東京都八王子市上恩方町高留 T 家⁽⁷⁾

先にあげた H 家に疱瘡神様、水神様、ダイジン、アクマツパライ、荒神の幣束や札を作って届けた、同町高留地区の惣社宮尾神社の宮司である T 氏に、疱瘡神の幣束について聞き書き調査を行った。

年末に上恩方町の各戸に配る正月のお飾り用の疱瘡神様、水神様、荒神様の幣

(7) 2015 年 5 月 17 日筆者調査、話者：上恩方町高留の惣社宮尾神社宮司、生年 1953 年。話者は先代の宮司が引退した 1983 年に宮尾神社の宮司となり、調査当時上恩方町内の 14 社を兼務していた。

束のことをオカマジメと言う。明治の半ば頃から代々宮司が使用している台帳に、オカマジメの依頼人の氏名、住所、幣束の種類と数量が記録されており、毎年台帳を確認して疱瘡神や稲荷神が必要であると記録されている家庭にオカマジメを配布する。しかし配布してもまつり方が分からなくなっている家庭では使用されていない可能性もある。先代の宮司は家にあがって御飯を食べながら幣束を作るという家が5軒ほどあり、話者も20年程前まではそのようにしていたが、そのような家庭は2015年には1軒だけとなった。オカマジメの赤幣束は、家によって疱瘡神として使う家と稲荷神として使う家があるため、2015年に疱瘡神の幣束を配布した軒数は不明であるが、毎年赤幣束は数10個ほど作っている。家を改築して幣束を飾る場所が無くなってしまったなどの理由で、今年から注文を打ち切りたいという連絡や、今年はお葬式があったので幣束は不要である、という連絡が来ることもある。

白幣束は竈神や歳神として使用され、全部で約2000個作る。赤幣束や白幣束に使用する紙は、東京都八王子市八幡町の大沢屋という紙屋から、一度に1000枚単位で購入した染め紙を使用している。幣束の軸は以前はT家で栽培していた細くて丸い篠竹を使用していたが、全て伐ってしまったため、現在は竹の長さを指定して神社庁から取り寄せている。疱瘡神の幣束の作り方は宮司によって異なり、丸みをつけたり角を尖らせたり様々であるが、話者は父親から教わった作り方を継承しており、幣束の上部を平らにし、その下の首筋の部分にカーブをつけている。毎年10月頃から話者1人で、型などを使用せず感覚を頼りに、小刀一本で1000枚ほどの幣束を全て切る。

上恩方町内において、疱瘡神のまつり方は各戸で異なり、疱瘡神の棚を作る家もあれば、床の間に幣束のみを飾る家もある。T家では大晦日に家の敷地の東南の角の地面に、直接赤い幣束を刺し、ぼろぼろに朽ちるまで放置しておく。刺すときの作法などは無く、幣束の近くに供物なども置かない。本来一夜飾りは良くないが、忙しいため大晦日に行っている。水神様と疱瘡神様は朽ちるまで放置しておくが、他の飾りは7日にはずして、おたきあげで燃やす。疱瘡神様が敷地内に侵入しないようにするためにこのような方法をとる。

疱瘡神を疫病神の代表として扱っているところもあるが、話者は厄神と疱瘡神とは違うものであり、疱瘡神はあくまでも病気の神を代表するものだと考えている。このような疱瘡神に関する話を、オカマジメを配る際に、疱瘡神をまつって

いる家庭には話すようにしている。



写真 オカマジメ (2015年5月17日筆者撮影)

左から疱瘡神、水神、ダイジング、アクマツパライ、荒神、シメ。
2014年12月に地区内で不幸があったため、2015年1月14日のセー
ノカミで燃やさず一年間保管している。

以上、筆者の聞き書き調査の結果から2つの事例を提示したが、ここから次のような点が指摘できる。〈東京1〉の事例から、(1)H家では疱瘡神は年初に年神と共に来臨し、棚を作り供物を供えて丁重にもてなされる。(2)年神に対し疱瘡神は棚の大きさ、棚の位置、ダイダイ・ユズリハ・ウラジロ・箸の有無によって差を付けられ、疱瘡神は年神より劣位にまつられる。(3)疱瘡神のまつり方に赤い幣束という特殊性が見られる。(4)H家では、稲藁やヌルデなどの棚の材料不足の問題を解消するにあたって、稲藁を他者から購入したり棚を再利用するなど、材料の調達方法を変えて、年神と疱瘡神祭祀の方法自体は変化させないよう努めている。(5)2013年まで疱瘡神のまつりを継続している根底には、毎年欠かさず行っているのでやめる訳にはいかない、という話者の意志は存在するが、疱瘡神への恐れや祈りなどの意志は存在しない。(6)年初の年神と疱瘡神のまつりは、事前に多くの材料の確保が必要であり、棚作りには技術と労力を必要とすること、当主と跡継ぎが行うことになっており女性は極力関わらないようにしていることなどから、年初の重要な祭祀として考えられていることが分かる。

一方〈東京2〉の事例から、(i)T家では疱瘡神は年初に年神等の神と同時に来臨する神として考えられており、(ii)疱瘡神は屋内に迎えられず、屋内への侵入を防ぐべき対象として扱われていることが分かる。〈東京2〉のような年初に来臨す

る疫病神の屋内への侵入や、疫病神が屋内に疫病を持ち込むことを防ぐ事例は各地に存在し⁽⁸⁾、また年初に年神を迎える前に、幣束などで屋内や家族の身体を祓い清め、その幣束を辻や門口などに刺すミソカッパライ、アクマッパライなどと呼ばれる行事の類いも存在する⁽⁹⁾。〈東京1〉のH家においてもアクマッパライと呼ばれる行事を行っているが疱瘡神はその対象とされない⁽¹⁰⁾。以上のことから上恩方町には、疱瘡神の侵入を防ぐ行事を行う家庭と、疱瘡神を年神と共に丁重にもてなす家庭が存在することが分かる。このように年初の疱瘡神のまつりは同地域内においても家庭ごとに方法が異なり、極めて個人的な祭祀であることが分かるが、本来疫病をもたらす神である疱瘡神が、年神と共に歓待される事例が存在することの意味を検討する必要がある。

3. 年初祭祀における疱瘡神の位置付け

次に市町村史の民俗編、調査報告書等から蒐集した青森県から佐賀県にかけての正月の疱瘡神祭祀の事例を分析し、年初祭祀における疱瘡神祭祀の位置づけを検討する。表1は蒐集した全ての事例を、正月の疱瘡神祭祀を形成する「迎え」「まつり」「送り」の3要素ごとに整理したものである。またさらに時期、場所、施行者、方法、目的などの項目を設けて整理し、疱瘡神と同時にその他の神がまつられる場合は対象の欄に整理した。ここでは主な事例をあげる。

-
- (8) 埼玉県新座市では正月8日に次のような行事が行われていた。「八日節供といい疫神様と呼ばれるバアサンの神様がいて、疫病を家の中に持ちこんでくるから家の中に持ちこまないように、メーカイと呼ばれる目籠を竹の竿にかかげて屋根に上げるという。メーカイは、目がいっぱいいつているから見張り番にもってこいだという。また、疫神様が庭をうろうろして、庭にあるものをさわってしまうので道具をはじめ洗濯物なども家の中にしまい、もし外に出ている疫神様がさわったものに触れると病気になるので、庭で麦わらや、ネギの皮を焼やし疫病が家の中に入りこまないように、えぶしたり、屋根にモチ草を刺して疫病よけをする」(新座市教育委員会市史編さん室『新座市史』第四巻民俗編、埼玉県新座市、1986)
- (9) 茨城県総和町稲宮では、12月31日の晩に当主がカドグチに幣束を立てて、疫病が入らないようにお祓いをした。これで屋敷地は歳神を迎えるのにふさわしい空間となる。この幣束はウジガミサマの後ろの箱に挿しておき、ドンドヤキの時に燃やす。(総和町史編さん委員会『総和町史 民俗編』2005)
- (10) 「アクマッパライは、竹の先にシメをつけたもので、これは歳神の棚の前面の左隅に差す。これを使って人を祓ったりはせず、差したままにしておく。これは歳神棚とともに下げられ、セエノカミに持って行き、セエノカミに際して燃やされる。」(八王子市市史編集専門部会民俗部会『新八王子市市民俗調査報告書第1集 八王子市西部地域 恩方の民俗』八王子総合政策部市史編さん室、2012)

〈青森〉青森県八戸市⁽¹¹⁾

正月に神棚の端に、「疱瘡神を供える」と言って赤い紙を敷いて重ね餅を供える。

〈宮城2〉宮城県七ヶ宿町⁽¹²⁾

年取りの夜に年神と同じ献立の膳を厄神と疱瘡神に供え、主婦が夕刻にその膳を雨戸を開けて縁側に供え、「疫病神さま、疱瘡の神さま、早く食べて帰ってけらっしゃい」と唱える。その後膳をおろして子どもに食べさせる。これは厄神を早く追出すためであると言う。

〈山形〉山形県西村山郡西川町砂子関K家⁽¹³⁾

年越しの夜に疱瘡神にお供えをあげる。このお供えは普通のお重ねと異なり、盛り上った形である。

〈茨城〉茨城県常陸太田市磯部町峰⁽¹⁴⁾

大晦日の晩に年棚を設ける。年棚は座敷の中央に長さ60センチくらいの板を吊るし、これにシメ縄を張り、直径15センチから30センチの鏡餅をのせ、その4辺に普通のオソナエ餅、15センチ程の鏡餅を3重ね供える。鏡餅にはいずれも干し柿1個に昆布を下げ、上にみかんをのせる。3重の鏡餅にはその中央に松の小枝と幣束を立てる。恵比寿、大黒には大きめなオソナエを、また特に疱瘡神にと小豆餅のオソナエを供える。

〈埼玉〉埼玉県入間市⁽¹⁵⁾

12月30日に年神様、大神宮様、御嶽様、疱瘡神様、エビス様、大黒様、荒神様（オカマ様）、水神様（井戸神様）、機神様、道具神様、雪隠神様、蔵神様、そして仏壇にそれぞれ2つ重ねの鏡餅を1組ずつ供える。

〈千葉〉千葉県長生郡長柄町山之郷⁽¹⁶⁾

1月16日の朝10時までに道祖神（疱瘡神としてまつる）にお参りに行く。この時小さな幣束とともに、下台に直径1センチほどの餅を3重ねにしておさめる。

〈神奈川1〉神奈川県相模原市田名X家⁽¹⁷⁾

(11) 前掲(3)

(12) 七ヶ宿町『七ヶ宿町史』(生活編)、1982

(13) 山形県教育委員会『月山山麓月山沢・四ッ谷・砂子関・二ツ掛の民俗—塞河江市ダム水没地区緊急調査報告—』1976

(14) 常陸太田市史編さん委員会『常陸太田市史』民俗編、1979

(15) 入間市史編さん室『入間市史』民俗・文化財編、入間市、1981

(16) 東洋大学民俗研究会『長柄町の民俗』1972

(17) 小林梅次「ヤクジンの宿」『民俗』85、1974

12月30日の午後にヤクジンさまの棚をつくる。この棚は割竹を簀子状に編み、そこに赤と青の幣束を立て、藁縄で納戸のちょうど仏壇の裏側に位置する場所に吊す。幣束は久所八幡でX家の分だけは年神様の幣束とは別に赤と青の幣束を作ってくれる。この日の夕方に年神棚も作る。晦日そばの支度を整えてから主人が風呂に入り、着物に着替えて納戸の戸を開いて「ほうそうかみ様、やくじんのかみ様、いちやの宿をいたします」と暗い外に向かって呼びかける。それから棚に神酒と晦日そばを供え、戸は開け放ったままで一家はそばを食べ始める。食べ終わるまで開けておくのが習慣だと言う。12月31日にケンチン汁を作り棚にもあげ、家族も食べる。以後1月6日まで供物をあげ続け、1月7日にこの棚は他のお飾りと共に撤去する。

〈神奈川2〉神奈川県横須賀市Z家⁽¹⁸⁾

大正末期から昭和初期の間、Z家では正月に玄関と歳神には三宝でお供えをあげ、仏壇と台所の荒神、疱瘡神、便所の便所神、井戸の井戸神などにはお供え餅をあげた。疱瘡神のお供え餅だけは違っており、上部が尖って赤いぼっちを付けた形状で、これを「疱瘡婆さんにあげる」と言った。疱瘡神のお供え餅は、12月28日に餅搗きをして作る。お供え餅の形に作って、その先を尖らせる。これは種痘の形になぞらえているという。なるべく長く尖らせた方が良く、柔らかいのですぐに倒れてしまうが、それを作るのが子どもたちの仕事で、東京タワーのように高い餅をつくった。先端には赤いぼっちが付いていたという。これは「疱瘡のお餅」と呼んでいたが、疱瘡にかからないように、という呪いであった。疱瘡饅頭は近所などに配った。

〈静岡1〉静岡県南伊豆町妻良⁽¹⁹⁾

大晦日に年神棚の端に赤い紙の上に小さい餅を三重にして供え、これを疱瘡神への供物とした。その日の夜に、家の者が玄関で外に向かい「ホーソーバーサン、トシヤドヲカセルカラコラッシュー」と叫ぶ。

〈兵庫〉兵庫県竹野町二連原⁽²⁰⁾

大年の晩に、ホウライ（三宝）の上に白米1升とミカン2つをコブで巻いてのせ、その周りに餅を2つ切りにしさらに細かくしたものを三宝の4隅に置き、か

(18)『新横須賀市史 別編民俗』横須賀市、2013

(19)『静岡県史 資料編23 民俗1』静岡県、1989

(20) 國學院大學民俗学研究会『民俗探訪（昭和38年度）』1965

ち栗と吊るし柿を家族の数より多くのせる。これを年徳神の掛軸の前に供える。またトビといて、吊るし柿と白米とコブを小さく刻んだものを紙に包んで家族の倍の数作り、床の間の疱瘡の神に供える。

〈奈良〉奈良県南葛城郡秋津村室I家⁽²¹⁾

オウツモゴリの晩、誰にも見られないように主婦が箕を持つて四ツ辻に出て行き、そこですくう真似をして帰って来る。そのまま家に帰り「ただいま」と声をかけ、これに対して家の者が「どうぞお上がり」と答へると奥の間へ入る。奥の間には他人から見られないように屏風が立ててあり、主婦はそこへ入り持っていた箕をそこへ置き、箕の中でお燈明を灯し正月のお餅一重ねと吊るし柿、蜜柑を供える。さらに翌元日には雑煮を供える。大晦日にハウソの神様が宿がなくて困っていたのを「宿してあげたらその家の者にヘンバが出来ん」と言うので、同家では毎年ハウソの神様に宿をしているのであって、代々I家の者には、ヘンバの者が無いと言う。村でこの行事を行うのはI家のみである。

〈鳥取〉鳥取県八頭郡若桜山中⁽²²⁾

大晦日に正月の神々を祀ると同時にデイや座敷の表などに疱瘡神の餅を供える。中には歳神の横などに供える家もあるが、大部分の家ではデイや座敷の畳の上などで、木地または麴蓋の上に供える。疱瘡神の餅は特に小さく豆粒大のものを2個お重ねにする。これは供え餅が大きいと大きな疱瘡に罹るというところから、特に小さくするのである。この疱瘡神は子どもの神だというのが神体らしいものはなく、お供えの小さな餅を疱瘡神の餅と呼んで、子供が持ち遊ぶようにしておくとよい。この餅は旧暦1月5日の年おろしの日に家中の者が分け合って食べる。歳神には注連飾りと共に花餅を供える。花餅は藁12本に餅をならせて稲穂を象ったもので、年おろしの後も保存しておいて旧暦6月1日に食べる。

〈岡山1〉岡山県真庭郡新庄町下町D家⁽²³⁾

歳神棚の傍に棧俵に柴を立てて疱瘡の神をまつ。そのオイワイ（疱瘡の餅と言う）はホトホトに来た厄年のものに与えていた。なおほうそうの流行した年に同様のものを作り部落境に立てていた。

(21) 山田隆夫「ハウソ神のヤドその他」『近畿民俗』2、1949

(22) 『西郊民俗』第8号、西郊民俗談話会、1959

(23) 文化財保護委員会編『正月の行事』2（鳥根県・岡山県）平凡社、1967

〈岡山2〉岡山県苫田郡奥津周辺⁽²⁴⁾

12月31日にハウソウ様をまつり、それを川に送る。このハウソウの神様にすえる餅は、上部を一寸つまんで、乳首状にしたものである。

〈香川〉小豆島⁽²⁵⁾

大晦日の夜、家の近くの四ツ辻へ行って、「疱瘡の神さん、カゼの神さん、正月三ケ日はわたしのうちへ、神床をつくってお祀りするために迎えにきました。常の日はどうぞお出でくださるな。さあ、わたしの肩へお乗りなされ」と言いながら、両手を背にまわしてこれら厄神を背負うかっこうをし、「よいしょ、よいしょ」と言いながら家へ戻ってくる。家のニワに入ると「どっこいしょ、ああ重かった」などと言いながら厄神を背から下ろす真似をする。そのあと、ニワの片隅に紙を敷き、餅を供え、夜は灯明を点じて正月3日間は疱瘡神、カゼの神のまつりを続け、三ケ日がすぎると、迎えたときと同じかっこうをしながら、もとの四ツ辻へ送り出す。

〈佐賀1〉佐賀県東松浦郡鎮西町加唐島⁽²⁶⁾

生児が2歳くらいになると疱瘡をうえるが、7日目を「ハウソウゴモリ」という。この日ハウネンさん(住職)を呼んで来て祈祷をしてもらう。ザシキの神棚に竹で編んだ簀に注連縄を張り、赤い紙の注連をさげ、「疱瘡の神さんにあげます」という。オヤコからは菓子などが贈られる。正月元日になると、小豆を3粒ほど餅の上において疱瘡の形をしたものを供える。流すようなことはしない。

〈佐賀2〉佐賀県東松浦郡鎮西町⁽²⁷⁾

正月に、神棚の端にあるほうそう神に供える餅は、二段重で上の餅にゆで小豆をつけておき、下に赤色の紙を敷いている。これは、ほうそう神送りといって、餅にほうそうをやらせるのだという。現在では、ゆで小豆をつけずに、赤い紙を敷くだけの所もある。この餅は1月7日に下げずに子の日に下げる。

(24) 佐藤米司「厄病神・悪魔の来臨―「岡山県の正月行事」について(2)―」『岡山民俗』第78号、岡山民俗学会、1968

(25) 川野正雄『小豆島民俗誌』名著出版、1984

(26) 坪井洋文「佐賀県鎮西町加唐島」柳田國男指導日本民俗学会『離島生活の研究』国書刊行会、1975

(27) 『民俗探訪(昭和42年度)』國學院大學民俗学研究会、1968

正月に疱瘡神をまつる事例は計25例とあまり報告されていないが、青森から佐賀にかけて数例ずつ分布しており、東北地方は青森に1例ある他、宮城と山形に集中しており、関東地方は茨城、埼玉、千葉、東京、神奈川と多く分布している。埼玉、東京に隣接する中部地方の南部にも分布が見られる。近畿地方は兵庫と奈良に見られ、隣接する鳥取、岡山まで広がりを見せている。四国地方は香川のみ、九州地方は佐賀で確認されている。全体の分布傾向として東北の一部と南関東全域に濃密に分布していると言える。

紹介した事例と表1から次のことが読み取れる。伝承地域によって多少差はあるが、正月の疱瘡神祭祀の時期は、大晦日の晩に迎えて1晩あるいは数日間まつってから送り出すという流れが形成されている。疱瘡神を迎える場所は玄関や四ツ辻などの境界で、送る場所も同じである。まつる場所は境界（出窓・縁側・敷地の角・ニワの片隅）や隠れた場所（仏壇の裏側・神棚の端・年神棚の奥・屏風の中）が多く、年神に対して劣位にまつる場合が多い。疱瘡神を迎えまつるのは、当主や跡取りといった家を守る人物や、主婦、疱瘡に罹病しやすい小児である。また、正月の疱瘡神祭祀に関して次の点が指摘できる。

第一に疱瘡神は年初祭祀において年神や厄神、カゼの神、エビス神、大黒神、水神、雪隠神、荒神などの神と同時にまつられることがあるが、これらの神と比較して、疱瘡神のまつり方に特徴がある。青森から佐賀には、盛り上がった形の餅、先を尖らせて先端に赤い印を付けた餅、上部を乳首状にした餅などを、疱瘡神に供える餅として特別に作っている事例が見られ、種痘の形になぞらえているのであるべく長く尖らせた方が良いという説明を与えている事例も存在するが、これは疱瘡に罹病してから6日目頃に体中に出来た発疹が盛り上がる症状の段階があり、この時期を無事過ぎると命に別状が無いと判断されることから、うまく患部が盛り上がり疱瘡や種痘によるワクチン接種後の症状が、無事快方に向かうようにとの願いを餅の形状で表現していると考えられる。また供え餅が大きいと大きな疱瘡に罹るため、疱瘡神に供える餅は特に小さく豆粒大に作るという事例は、餅の大きさを疱瘡の症状の軽重に見立てて疱瘡の症状が軽くなるようにとの願いを表現していると考えられる。また小豆を3粒ほどを餅の上において疱瘡の形をしたものを供える、二段重ねの上の段の餅にゆで小豆を付け餅に疱瘡をやらせる、という事例が存在するが、これは小豆を疱瘡の発疹や膿疱に見立て、予め餅を身代わりとし疱瘡に罹病させることで、疱瘡を予防するためであると考えられ

表 1 青森県から佐賀県における年初の疱瘡神祭祀

伝承地	迎え			まつり			
	時期	施行者	方法	時期	場所	施行者	対象(神)
青森				正月	神棚の端		疱瘡
宮城 1				大晦日の夜	別間の出窓		年/疱瘡
宮城 2				トシヤ(年取りの夜)の夕刻	雨戸を開いて縁側	子供	年/厄/疱瘡
宮城 3				年越～正月中	中間の後のオカミの出窓		年/疱瘡
宮城 4				正月中		年神は後年男 疱瘡神は当主	年/疱瘡
宮城 5				年越～正月中	神棚	年神は年男 疱瘡神は祖父か長男	年/疱瘡
宮城 6				元朝			疱瘡
山形				年越の夜			疱瘡
茨城				大晦日の晩			年/恵比寿/大黒
埼玉				12月30日			年/大神宮/御嶽/疱瘡/エビス/大黒/オカマ/水/機/道具/雪隠/蔵/仏壇
千葉				～1月16日10時			道祖神(疱瘡)
東京 1				12月31日～1月4日	年神棚の奥	家主・跡取り(女性は禁止)	年/疱瘡
東京 2				大晦日	敷地の東南の角		疱瘡/水
神奈川 1	12月30日夕方	主人	ふろに入り着物に着替え、納戸の戸を開いて「ほうそうかみ様、やくじんのかみ様。いちやのやどをいたします」と外に向かって呼びかける	12月30日夕方～1月6日	納戸の仏壇の裏側	主人	年/厄/疱瘡
神奈川 2				12月28日	仏壇・台所		年/荒/疱瘡/便所/井戸
静岡 1	大晦日の夜	家の者	玄関から外に向かって「ホーソーバーサン、トシヤドカセルカラコラッシュー」と叫ぶ	大晦日	年神棚の端		年/疱瘡
静岡 2				元旦の早朝～モチイ	神棚の前		疱瘡
兵庫				大年の晩	床の間		年/疱瘡
奈良	大晦日の夜	主婦	誰にも見られぬように箕を持って四ツ辻へ行き、すくう真似をして帰り奥の間へ入る	大晦日～1月1日	奥の間の屏風の中		疱瘡
鳥取				大晦日～1月4日	デイ・座敷の畳の上		年/疱瘡
岡山 1				正月	年神棚の傍		年/疱瘡
岡山 2				12月31日			疱瘡
香川	大晦日の夜		家の近くの四ツ辻へ迎えに行き、背負う恰好をし、家の二ワで背から下ろす	大晦日の夜～1月3日	ニワの片隅		カゼ/疱瘡
佐賀 1				1月1日			疱瘡
佐賀 2				正月	神棚の端		疱瘡

まつり			送り		
	方法	目的	時期	施行者	方法
供物	赤い紙を敷いて重ね餅				
供物	膳を別間の出窓に供える				
供物を食べる	年神と同じ膳を、厄神と疱瘡神に2つ用意して縁側に供える			主婦	「疫病神さま、疱瘡の神さま、早く食べて帰ってけらっしゃい」と唱える
供物	年神と同じ膳を年神から離して供える				
供物を食べる	年神より小さい膳を供える				
供物を食べる	他の神と同じ膳を供える	疱瘡に罹らないように			
供物					
供物	もり上った形の重ね餅				
供物	小豆餅のオソナエ				
供物	2重の餅1組(カガミモチ)				
参詣・供物	小さな幣束・重ね餅				
棚(藁束と赤幣束)・供物	棚を年神より小さく作り、燈も付けず、奥にまつる	疱瘡は恐ろしい病気だったから	1月7日	集落の人々	燃やす
赤い幣束を地面に刺す	他の神と異なり外にまつる・処理せず放置	もともとは疱瘡神が敷地内に入ってこないようにするため			朽ちるまで放置
棚(赤と青の幣束)・供物を食べる	年神棚とは別に棚を作り、赤と青の幣束を立てて厄神と疱瘡神をまつる		1月7日	子ども	棚を撤去(以前は子どもが、幣束をせいの神さんと称し、かついで家々を歩いた)
「疱瘡婆さんにあげる」と言って供える→近所に配る	年神には三宝で供え、他神にも餅を供える。疱瘡神の餅にだけ上部を尖らせ、赤い印を付けた餅	疱瘡にかからないようにというまじない			
供物	赤い紙に小餅を三重				
棚・供物	他の神と同じ棚を作り供物を供える				
供物	供物の場所・つるし柿と白米とコブを刻み、紙に包み、家族の倍位供える				
供物	餅・つるし柿・蜜柑・雑煮	大晦日にホウソの神様が宿がなくて困っていたのを「宿してあげたらその家の者にヘンバが出来ん」と言われるため			
供物→食べる	木地または藁蓋の上に、小さく豆粒大の餅を2個重ね、疱瘡神の餅と呼ぶ	供え餅が大きいと大きな疱瘡に罹るから、特に小さくする	1月5日		供物を下げる
供物→厄年の者に与える	棧俵に柴を立てる・疱瘡の餅を供える				
供物	上部を一寸つまんで、乳首状にした餅				川に疱瘡神を送る
供物	カゼの神と同じ供物を供える		1月4日		迎えたときと同じかつこうをしながら、もとの四ツ辻へ送り出す
供物	小豆を3粒ほど餅の上において疱瘡の形にしたもの				
供物	下に赤い紙を敷き、二段重ねで、上の餅にゆで小豆をつけた餅	ほうそう神送りといって、餅にほうそうをやらせる	子の日		餅を下げる

る。また、東京タワーのように高く先端に赤い印のついた餅を作るのは子どもたちの仕事であった、疱瘡神は子どもの神であり疱瘡神の餅を子どもが持ち遊ぶようにしておくといふ、という事例から、年初の疱瘡神祭祀がまだ疱瘡の免疫を持たず抵抗力も無い、疱瘡によって命を落とす危険が高い小児を対象にしたまつりであることが考えられる。このような疱瘡神祭祀の特殊性から、疱瘡神の供物は同時にまつられる他の神との区別を計るためだけで無く、一年の初めに疱瘡の予防や罹病した際の症状の軽減を期待して用いられていることが指摘できる。またこのような供物や、疱瘡神の表徴や疱瘡神を招く装置として用いられる赤紙や赤幣束などは、疱瘡罹病時に行われる疱瘡呪術に用いられる呪物と類似していることが指摘できる⁽²⁸⁾。

第二に疱瘡神は早めに送り出すべき神として認識されていることが指摘できる。疱瘡神をまつる場所が、出窓や縁側などの家の外に面した場所であることや、「疫病神さま、疱瘡の神さま、早く食べて帰ってけらっしゃい」という唱え言から、疱瘡神を一度丁重にまつてからなるべく早く帰って欲しいという意図が読み取れる。またこのような唱え言は、疱瘡に罹病した際に患部に小豆や鼠の糞などを入れた湯を笹の葉でかけて平癒を促す、「笹湯」と呼ばれる呪術を行う際に唱える言葉と類似する⁽²⁹⁾。

第三に年初における疱瘡神祭祀が、集落内の各戸で共通した方法でまつられるのでは無く、家ごとに伝承される祭祀方法に基づいている点が指摘できる。大晦日に疱瘡神に宿を貸してあげるとその家の者にヘンバ（痘痕）が出来ないと言うので毎年宿をしていており、代々その家の者にはヘンバの者がいないという事例は、集落内の特定の家に伝わる伝承に基づいた事例である。〈東京1〉のH家の場合も、駒木野集落内で疱瘡神をまつるのはH家だけであり、年初の疱瘡神祭祀が家ごとのまつりであることが分かる。また宗教者の関わりがほとんど見られず、年初の疱瘡神祭祀は宗教者によって伝承されたものではないと言える。

(28) 拙稿「病気への理解と対処—疱瘡習俗を中心に—」『伝承文化研究』第13号、國學院大學伝承文化学会、2015参照。

(29) 静岡県中伊豆町原保では、種痘時にサイノカミさんに疱瘡団子を供える。隣近所に配ると疱瘡が軽く済む。「イノ一峠のマゴ杓子、元の社へ立ち帰れ」などと三遍唱え鼠の糞・米・麦・稗・小豆・ホラの貝・アワビ貝の入った湯を棧俵の上から笹で腕などにかける。サイノカミさん（道祖神）に笹湯に使用したもの・棧俵を納める。（杉原文夫・今村充夫・伊藤曙寛・横山旭三郎・箱山貴太郎・土橋里木・木村博・加藤参郎・河上一雄『中部の民間療法』明玄書房、1976）

このように正月の疱瘡神祭祀と疱瘡罹病時に行われる呪術との類似点が見られることから、疱瘡罹病時や流行時、種痘接種時に行っていた呪術が、年中行事に組み込まれた可能性が指摘できる。また特定の家において年初に疱瘡神をまつることが重要視されていることが指摘できる。

4. 年神と疱瘡神の性格

前章では、疱瘡罹病時の呪術と年初祭祀との結びつきを指摘したが、疱瘡神が年初祭祀に結びついた理由として、次の可能性も考えられる。それは年神のアラガミとしての性格と、疱瘡神のアラガミとしての性格の結びつきである。盆の精霊と外精霊に相当するのが正月の年神と厄神であるとの大島建彦による指摘や、年初に厄神をまつる理由を先に雑神をまつり主神への障りを未然に防ぐという日本の祭りの構造によって説明した田中宣一の論は、先の章で指摘した疱瘡神祭祀の特殊性を説明できない。年初祭祀において、疱瘡神は確かに境界や隠れた場所などに年神に対して劣位にまつる場合が多く、これを雑神のまつりの特徴と考えることも出来るが、年神と同時に年初に丁重にまつり、機嫌をとって早く帰らせるために送る場所に近い場所にまつるという、疱瘡神の鎮送を意図した行為であるにすぎないとも考えることもできる。

鹿児島県南さつま市旧大浦町平原地区では、毎年2月11日に伊勢講を行っており、この行事でまつられる伊勢神は疱瘡神であると言われている。伊勢神（疱瘡神）は荒々しい性格をした神として認識され、アラガンサア（荒神様）と呼ばれており、毎年伊勢講の際に平原地区の者全員で祝詞をあげた後、椿の枝を持って伊勢神（疱瘡神）の祠を椿の枝で叩いて鎮め、平原婦人会の者が疱瘡踊りを踊って送り出すということをしないと、集落の者が怪我をしたり病気になったりすると言われている。⁽³⁰⁾ この事例には疱瘡神のアラガミとしての性格が表れており、このような疱瘡神の性格が、年神の災厄をもたらすアラミタマ（荒魂）という機能と、富や利益をもたらすニギミタマ（和魂）という2つの機能に結びつき、年神の荒ぶる恐ろしい神としての性格が、疱瘡神や厄神として表現されたのではないだろうか。これらのことから、年初に厄神や疱瘡神をまつる理由は、年神の

(30) 2016年2月11日筆者調査

荒々しい性格と厄神や疱瘡神の荒々しい性格との関連性から説明できる。

おわりに

本稿では、旧来の研究において行われなかった、青森県から佐賀県における正月の疱瘡神祭祀の事例分析を行うことで、その様相と年初祭祀における疱瘡神の位置付けを検討した。その結果、年初祭祀における疱瘡神の装置や供物が、罹病時や種痘時に行われる呪術に用いられるものと共通していることから、臨時的に行われていた疱瘡呪術が定例化され、年中行事に組み込まれた可能性を指摘した。また旧来の研究が年初に厄神をまつる理由を、先に雑神をまつり主神への障りを未然に防ぐという日本の祭りの構造によって説明したのに対し、災厄をもたらすアラミタマ（荒魂）としての機能を持つ年神の、荒ぶる恐ろしい神としての性格が、厄神や疱瘡神の性格と、年神と共に疱瘡神を年初にまつり早いうちに帰ってもらうことで一年間安泰に過ごそうする心意に結びつき、年初の疱瘡神祭祀を形成したと指摘した。